

防犯カメラ急増 意識変化

東京
150年

事件編 ②

ビル応接室にあるモニター画面に記者の顔が映された。その脇にデータが表示された。
「怪しさ 0」
4月上旬、都内で最先端の防犯システムを取材中だった。気づかないうちに、小型ビデオカメラで撮られて、不審者かどうか解析されていた。
ロシアでテロ対策のために開発

された画像処理技術で、不審者を事前に検知できるという。国内で独占販売するエルシスジャパン（品川区）の四方堂暁治代表（55）が仕組みを解説する。

「映像から皮膚や目、口元などの細かな動きを検出し、攻撃性など精神状態を判断する。不審かどうかを測る一つの物差しです」
実験で蓄積した膨大なデータから判断して、基準を超えたら不審者として警告する。3年間で警備や電機メーカーなど大手を含む約50社と取引を始めている。

進む技術 人権との共存模索

街に防犯カメラがあふれている。駅、商店、ビル、街灯……。急速に普及したきっかけは「世田谷一家殺害事件」とされる。

20世紀最後の日の朝、惨殺された一家4人が自宅の中で見つかった。現場には指紋や衣服など多くの遺留品が残っていたが、いまでも犯人は捕まっていなかった。

警視庁の警察官は4万3千人で、全国の6分の1を占める巨大組織だ。創設は1874（明治7）年で、重大事件の捜査経験も豊かだ。それでも行き詰まる。有力な目撃者も現れず、逆に「防犯カメラ」への関心が高まった。

路上犯罪が多発する新宿・歌舞伎町に2002年に警視庁が初めて、街頭に防犯カメラを設置した。地元からの要望で渋谷などに広がる。ピッキング盗などで治安が戦後最悪の時期と重なる。

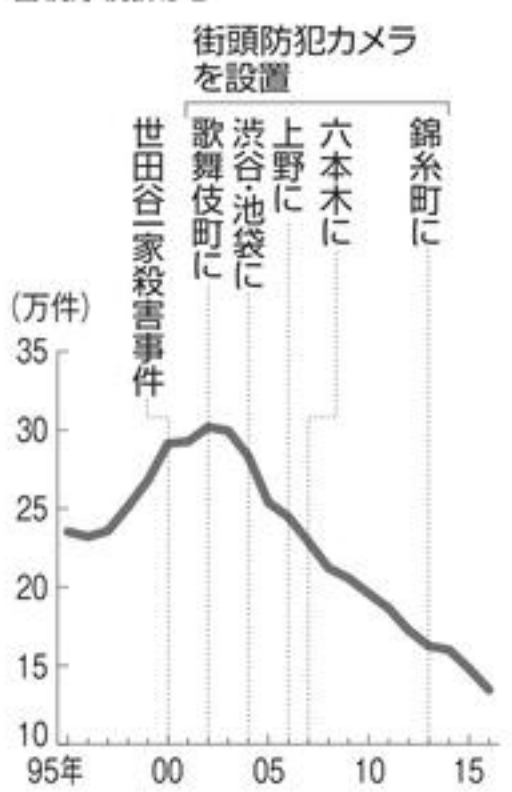
減り始めると空気は変わる。元警察庁生活安全局長で都副知事も務めた竹花豊さん（68）は退任後も、防犯カメラ設置など街の防犯対策に力を注ぐ。

「カメラの効果に加え、周囲の人の防犯意識も高まった」
今回の全車両への防犯カメラ設置の発表で、JR東日本幹部は社会の変化を感じた。
「女性専用車にカメラを設置した約8年前は人権面で懸念の声があがった。今回はほほほ」

実は、戦前にも女性専用車はあった。1912年、山手線に登場。新聞は当時、日露戦争の英雄とされた乃木希典大将の関心事となっていた。1912年、山手線に登場。新聞は当時、日露戦争の英雄とされた乃木希典大将の関心事となっていた。

王子市の女性が記録された。女性はその後、男の部屋で遺体で見つかる。部屋に残されていた遺体は9体で、連続殺人事件として捜査した警視庁は複数のカメラ映像を分析し、男の動きを追った。

東京都内の刑法犯認知件数の推移
警視庁統計から



①歌舞伎町の防犯カメラ。飲食店などが集まる一帯に警視庁が16年前に設置した。新宿区歌舞伎町1丁目。世田谷一家殺害事件の現場。すぐ裏の公園には園児や親子連れの歓声が響く。世田谷区上祖師谷3丁目。

無数の機械の目で犯罪を防ごうとする大都会。人権とどう共存させるかも常に模索が続く。
(山浦正敬)